

平成 22 年 6 月 14 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19560625
 研究課題名（和文） 高齢者居住施設におけるプレイス・アタッチメントと環境行動
 研究課題名（英文） Place Attachment and Environmental Behaviors Concerning Nursing Homes

研究代表者
 古賀 紀江（KOGA TOSHIE）
 前橋工科大学・工学部・准教授
 研究者番号：10295454

研究成果の概要（和文）：高齢者居住施設に関して多くの知見が積み重ねられ、施設デザインに反映されている。今後、施設居住におけるQOLを高めるためには、これら施設の利用者自身が施設に与える評価を知り、考察する必要がある。新たな住まいに愛着を持てるかどうかはその後のQOLに大きな影響を与えると考え、研究ではプレイス・アタッチメント（PA）の概念を手掛かりとして評価指標を作成、高齢者居住施設利用者に対して実施した。結果、指標の有効性を確認すると共に、結果から施設に対して愛着を持つための具体的工夫についての示唆を得た。また、PA評価の傾向と施設利用者の所有物や居室に対する第三者の印象評価について関係を考察した。

研究成果の概要（英文）：Much knowledge has been accumulated concerning nursing homes. Such knowledge is reflected in their designs today. From here on, it is necessary to understand and consider the evaluation of these facilities by the users themselves to improve the quality of life (QOL) in these facilities. Based on our belief that attachment conferred on new residences has a great effect on QOL afterwards, our research created evaluation indicators based on the concept of Place Attachment, and we surveyed elderly users of nursing homes. Our results demonstrated the effectiveness of these indicators, and we also obtained ideas about specific methods to create attachment to nursing homes. We also considered the relationships between the PA evaluation results, the possessions of facility users, and the evaluation of the living spaces by third parties.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 19 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
平成 20 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
平成 21 年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：建築計画

科研費の分科・細目：建築学 ・ 都市計画・建築計画

キーワード：プレイス・アタッチメント、評価、高齢者、高齢者居住施設、所有物、QOL、居住環境、印象

1. 研究開始当初の背景

日本において人口の減少と高齢化は、ここ十数年の間、社会に多くの課題を提起してきた。長寿社会のわが国では、高齢期に身体機能が低下してから後の生活に関連して、「住

まい」の確保と質的充実はこの課題解決の中で、大きなテーマの一つと認識され、建築計画の分野でも、各種居住施設の整備や住宅改修について多くの研究が行われてきている。研究では、これらの居住環境としての機能と

共に、そこでの生活の質をどのように確保するかについても多くの考察が積み重ねられており、ここ10年の研究動向の一つの特徴と捉えることができる。

これまでの傾向として、研究者の多くが目指してきたことは、居住者が自らより自分らしい環境を構築することが可能な環境の提案である (KOGA, YOKOYAMA et al.(2002)^{文1}他)。現在の高齢者施設に関しては、その施設環境のあり方について一定の姿を示し得た段階とも言うことができる。即ち、高齢者居住施設研究はここに至って、様々な知見をもとに用意された環境の利用者自身はそこにいかなる評価を与えているのかを知るべき段階にきたと理解できよう。また、この評価は、施設の利用者による使用後の評価として、これまでの研究成果の実効性を確認するという意味も併せ持つ。

同時に、人口の高齢化、人口減、少子化を含めた家族形態の変化、長寿化に伴う虚弱、疾病高齢者の社会的増加は、社会で必要とされる住まいのあり方の多様化と、その機会の増加を予測させる。転居先の「住まい」が「住まい」として安定した環境として受け入れられる素地を持つことは、ライフサイクルを考慮した住環境計画の上で非常に重要な意味を持つ。居住者自身による新たな住まいに対する「愛着」の評価はこのための大きな手がかりとなり得よう。

そこで本研究では、施設に対する居住者の「愛着」(place attachment) の評価指標を作成し、調査、分析を行う。プレイス・アタッチメントの概念を示して影響力を持った Altman(1992)^{文2}によれば、プレイス・アタッチメントは、「人々と場所との絆」とも言うことができ、以来、社会科学の諸分野で、様々な議論が展開されてきた概念である。しかしながら、上述の点に焦点をあてた研究、議論は殆どないのが実情である。以上が本研究の着想に至った背景である。

2. 研究の目的

研究では、①プレイス・アタッチメントの評価指標の検討と検証、②施設居住者のプレイス・アタッチメントの実際と環境行動の関連について明らかにする。これにより、高齢期における居住場所移動後の居住者による環境評価を得る方法を明らかにし、QOLの向上に資する知見を得る。

3. 研究の方法

既往研究の知見をもとにプレイス・アタッチメントの評価指標を抽出し、①その検討と検証のため、高齢者居住施設、高齢者専用住宅の利用者を対象に調査を実施、確定した評価指標を用いて、②施設居住者のプレイス・アタッチメントの実際と環境行動の関連に

ついて考察する。入居者の環境行動に関しては、生活を反映されやすい「もの」から間接的に捉えることにした。また、考察のために、③居住施設環境の持つ雰囲気に関する第三者による環境の評価実験を実施した。

4. 研究成果

以下に上述の流れに沿って行われた4つの調査の成果を記す。

<高齢者居住環境評価について>

4.1 プレイス・アタッチメント評価を用いた高齢者居住施設環境評価

1) 調査目的：特別養護老人ホームの居住者が自分の居住する環境をどのように評価しているかを明らかにする。またそのための手法を確立する。

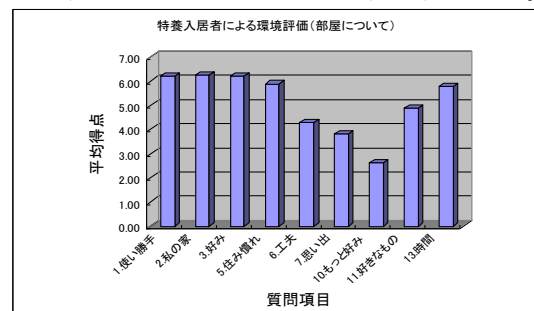
2) 調査方法：岐阜県のJ特別養護老人ホームを対象施設とし、その居住者に質問紙にもとづくインタビューを行い、7段階評価の回答を記入。結果を集計した。

調査対象者は9名(男性1/女性8)で、平均年齢は87.6歳。居住年数は約10年が5名と4年未満が4名だった。ADLレベルが比較的高く認知症程度は軽度～中度で、普通の会話が可能な方を対象とした。

人は居住することによって住居や場所、そこにある人や物に愛着を持つことが知られている (Altman & Low, 1992)。質問紙では全体的感情的評価としてそのプレイス・アタッチメント(以下PA)の程度を用い、関連が期待される環境評価項目との対照を試みる。

質問紙は大谷・芳賀(2003)を参考に、自分の部屋に関する質問と住んでいる施設に関する質問の2種類を作成した。愛着を測る尺度には「ここにずっと住み続けたいか」を採用した。部屋および施設の質問項目は大まかに a) 環境への慣れを問うもの、b) 好き嫌いの感情を問うもの、c) 場所アイデンティティの形成を問うもの、d) 環境の機能を問うもの、e) 環境での実際の活動に関するものの5分類について考えたが、調査では各項目をランダムな順番で質問した。

3) 調査結果：図1に質問項目とそれに対する評価の平均得点を記す。各項目とも1：全くそう思わない～7：全くそう思うである。



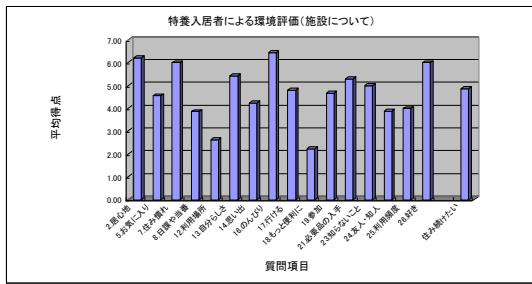
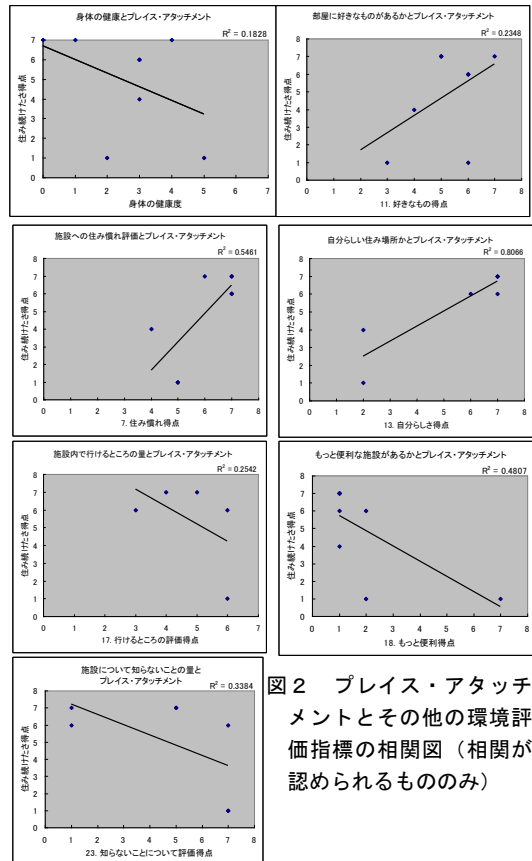


図1 調査結果概要

特別養護老人ホームの施設へのPAについては山本・城(2008)の類似の調査がある。その評価値の平均は5.6であり、今回の4.9より若干高いものの類似したレベルである。従って特別養護老人ホーム居住者のうち比較的身体機能が強く認知症が軽度の者に直接尋ねる今回の手法の有効性が確認された。

図2にPAの指標「ここにずっと住みたいか」への回答値と相関の認められた環境評価指標について相関図を示す。PAは、身



体機能の低下とともに増し、また部屋に好きなものをたくさん置くことで増す傾向が示唆される。また、PAは、施設への住み慣れ感や自分らしい住み場所と感ずることと正の相関がある。施設内で行ける場所が多いか、もっと便利な施設があるように思うかについては、負の相関の傾向が示唆される。また

施設内で知らないことが多いと感じることとPAも負の相関をする傾向が示唆される。

4) **まとめ**：以上の内、部屋に好きなものを置いてもらうことや、施設内で知らないことを減らす工夫をすることは、施設への愛着を増すような今後の具体的な環境上の取り組みの方向性を示すものとして重要であろう。

4-2 第三者による高齢者居住施設環境評価 その1 食事環境

1) **研究の目的と方法**：ある住まいに対して居住者以外の他者が持つ生活環境の印象とプレイス・アタッチメントの関連について考察を加えるために、第三者による高齢者居住施設の生活環境評価の手法と分析方法の確立を目的とした実験・分析を行った。研究では、食堂に場所を限定して、個人の食事行動を取り上げた。「食事」は、生活の豊かさ、生活の質に直接関わる、極めて日常的な、また生きる上での最も基本となる日常のQOLに直結したイベントであるため選択した。

2) **方法**：実験は、食事の前、食事中、食後の3つの時間帯に対して約1分のビデオクリップを作成、被験者はPCでこれを繰り返し視聴して、その環境の雰囲気の評価と物理的な環境についてSD法を応用した評価シートを用いて評価を行う。被験者は建築学科の学生30名である。また、資料提示方法の違いが評価結果に与える影響を考察するために、大スクリーンによる一斉一度視聴(建

印象の評価項目	施設		
	O	A	P
①楽しそう	7.23	7.83	8.83
②馴染み深さ	8.97	8.47	10.57
③伝統性	7.43	7.13	11.37
④馴れ馴れしさ	7.87	7.80	9.47
⑤おいしそう	8.57	8.83	9.33
⑥癒ただしさ	5.33	10.30	8.03
⑦明るさ	8.93	10.13	9.47
⑧賑やかさ	7.97	9.62	9.67
⑨暖かさ	9.13	8.83	10.43
⑩落ち着き	9.90	6.87	8.70

多重比較の結果 (Bonferroni法)

P>O
P>A
P>A,P>O
P>A,P>O
A>P>O
A>O,P>O
P>A
O>A,P>A

表1 施設ごと、時間帯別評価の平均：多重解析で差が認められた項目に網かけ。濃>薄

※食事前、中、後における平均点の合計に、施設間で有意差が認められたところに網かけをした。濃い方が大きい。

築学科学生50名による)で同一内容の実験を行い比較をした。また、ビデオクリップは日本のO施設、韓国のA、P施設の3つの施設のものを用意した。韓国のP施設では伝統的な起居の床座で食事が行われていた。

3) 結果と分析

①**概要** 食事場面のビデオを視聴による場所の印象評価で得た、各評価項目について食前・食中・食後の得点3つを合計して、3施設の比較をした。学生による回答の分散傾向から本論ではデータの正規性を必要としない多重解析手法の一つであるBonferroni法を用いて比較を行った。韓国や日本で伝統的な床座の食事様式である施設Pは、③伝統性、④馴れ馴れしい感じで他の2施設よりも高得点となるなどの結果が得られた。(図3) 以上から3施設の食事場面から学生が得た

項目	ビデオ視聴のタイプ	
	繰り返し・個人	一回一斉
①楽しそう	P>O	A>O P>O
②なじみ深さ	P>A	P>A P>O
③伝統性	P>A P>O	P>A P>O
④なれなれしさ	P>A P>O	P>A P>O
⑤おいしそう	—	P>A P>O
⑥あわただしさ	A>P>O	A>O P>O
⑦明るさ	—	—
⑧にぎやかさ	A>O P>O	A>O P>O
⑨あたたかさ	P>A	P>A P>O
⑩落ち着き	P>A O>A	P>A

表2 ビデオ視聴法の違いと得点平均の傾向(多重比較)

印象はそれぞれの施設の特徴を反映していたものと考えられる。用意したビデオクリップによって学生が施設により異なる特徴を映像体験から得られたことを示唆する結果と捉えられる。②視聴法による評価の差 上述の結果を、一斉一度視聴による実験の結果と比較したところ、ビデオの視聴スタイルの相違は量的な意味での得点傾向に相違をもたらしたが全体の評価傾向の相違に結びつかないという結果を得た(図4)。よって、映像資料の提示方法に関わらず、その場所の雰囲気の捉え方の傾向はある程度一定すると考えられる。③物理的環境評価と印象評価の関係 図4に示すように、場面の好印象と場面が繰り返らばれている場所の物理的環境の高評価が必ずしも一致しないことを示している。この結果は、被験者は施設の構築環境や家具のデザインを見ているだけではなく、人が活動する環境全体を見て印象評価をすることができていることを示唆するものと理解することができる。

4) まとめ: 以上により第三者による生活環境の印象評価実験手法を確立し、また得られた評価の一応の妥当性が示唆された。

<居室内の評価>

4-3 高齢者居住施設居室内のもの環境および居室へのプレイス・アタッチメント

1) 研究の目的と背景: 高齢期に身体機能が低下してから後の生活に関連して、「住まい」の確保と質的充実は、大きなテーマの一つと認識され、建築計画の分野でも、各種居住施設の整備や住宅改修について多くの研究が行われてきた。ところで、その住まいの良し悪しは、単に物理的な環境面で優れているというだけではなく、結果として入居者自身がその環境に満足できるか否かに関わる問題である。様々な知見をもとに用意された高齢者居住施設に暮らす利用者自身による環境の評価も必要となろう。しかし一方で、現在の介護保険下での施設利用者は一般に介護度が高く、自ら環境を評価することが困難な場合が多い。そこで本研究では居住施設利用者の生活環境の質を客観的に捉える視点として「もの」環境について検討を行う。

本研究では、高齢者居住施設での①居室内の所有物の状況から居住施設利用者自身の

表3 調査協力者と「もの」の所有状況

番号	年齢	新築後施設居住年数	ADL程度	認知症程度	ものの総数	行為対象の個数	観賞対象の個数
1	99	38.5	17	2	59	40	19
2	82	106	6	3	49	33	16
3	94	4.5	17	1	76	42	34
4	90	106	8	2	73	36	37
5	84	3	14	2	33	25	8
6	75	106	18	2	69	49	20
7	88	13.5	17	2	113	64	49
8	93	106	2	3	80	47	33
9	83	106	11	5	52	39	13
平均	87.6	65.5	13.3	2.4	67.1	40	20

利用実態を捉える、②環境への愛着を中心とした入居者自身による居室及び施設環境に対する評価調査、の2つの調査を行った。

2) 方法: 調査施設: 1973年に開設され、2000年に個室・ユニットケア対応の介護施設として120名定員の施設を新築し、現在に至っている。

調査は、2009年8月、12月に実施した。

調査対象者: 2000年の転居時点で既に入居していた人で、インタビューが可能な人5名と、調査時にインタビュー調査の協力を得られた4名である(Table 1)。平均年齢は87.6歳、平均ADLは13.3(Max18点^{※1})、平均の認知症程度は2.4(最も進んだレベルで6点^{※2})である。

調査内容: ①所有物調査 プライバシー配慮の必要から、撮影許可を得られた居室の四周を写真撮影し、そこに写りこんだものを便宜上、各個人の所有物としてカウントする方法をとった。②プレイス・アタッチメント(PA)調査 本研究では、自分の住まいに対する愛着の程度を捉えることを目的として作成した調査票を用いた。評価項目は、居室と施設及び地域について問うもの26項目、7段階評価とし、ヒアリング形式で行った。

3) 結果と分析: ①概要 居室内で見えがかりの所有物は、平均で一人あたり67.1個である。所有物を何かの行為行動に用いる行為対象^{x1}と見たり飾ったりするための観賞対象^{x2}とに分類したところ行為対象の平均はおおよそ40個、観賞対象はおおよそ19個であった。居室内の所有物の多くが行為対象で占められる点は他施設の調査と類似した結果である(KOGA, YOKOYAMA et al.(2002)^{x1}等)。

②ADL、認知症程度と所有物の数の関係 所有物の個数とADLや認知症程度の間に関連は認められなかった。身体機能の低下や認知症の進行は、居室内の物品の状況に影響を与えやすく、第三者が介入しない場合、ADLの低い人や認知症レベルの高い人の居室内のものの環境は閑散としたものになりがちである^{x1}。本施設は2000年に、6人部屋で構成されていた旧施設から完全個室型の現施設への建て替えが行われた。その際、居室に押入れを設けるなど所有物を持ちこめるような環境整備に対して設計面での配慮がなされている。こうした計画上の効果と予測することもできるが、今後検証する必要がある。③居住年数と所有物の数の関係 新築前

からの入居者と、新築後の入居者で居住年数の長短のグループ分けをして、ADL、認知症、及びものの所有数の状況を比較した。グループごとの平均の値を見ると長期入居者群でADLが低く、認知症程度も高い(進んでいる)傾向が読み取れる。しかし、各項目について2群間の平均の差に統計的有意性は認められない。「認知症程度」の差に若干の有意傾向が認められる程度(Mann-Whitney's U test $p=0.059>0.05$)のみである。所有物の平均量に関してもグループ間で有意差は認められない。つまり、この施設では居住年数による所有物の総数に差はない。④居室に対する利用者のPAとものの量 環境評価の評価項目中、「室内に好きなものがたくさんある」という回答に対して、所有物の多少による差が認められた。所有物の多いグループの平均が6点、少ないグループの平均は3.75点の大差がある。

4)まとめ:

4-1 で示したように部屋に好きなものがたくさんあることで、「ここにずっと住み続けたいか」という愛着指標が増す傾向が認められている。つまり、居室内のものが多くことは、居住者のPAが高い可能性が強い。

4-4 第三者による高齢者居住施設環境評価 その2 居室内環境

1) 研究の背景と目的: 前節、4-3 では居住施設の居住者の生活実態と居住者によるPA評価の考察を行った。分析対象とした入居者の居室から第三者はどのような印象を受けるかを実験により検討する。これは4-3節でも記したように、一般に介護度の高い介護高齢福祉施設利用者の生活環境の質を客観的に捉える知見につなげるためである。

2) 研究の方法: 前節に同じ岐阜県のA特別養護老人ホームの入居者を対象とした調査資料を用いて以下の手順で実験を行った。

印象評価実験は、大学生77名を被験者として実施した。被験者の学生には、評価対象である高齢者9名の居室の特徴をよく表した写真をカラー印刷したシートを個別に用意した。学生はこれを見ながら評価シートに記入する。評価項目及び方法は4-2節の実験と分析結果を踏まえ、SD法を応用した10項目の形容詞対による5段階の評価方法を採用した。実験は、2010年1月に実施した。

また、この結果を入居者が居室内に所有する所有物の量と対応させて分析を行い考察を深める。所有物の量は前節参照のこと。

3)結果と分析

学生による9名の居室に対する印象評価を表2にまとめた。尚、No.8は所有物が多いグループであるのに実験写真中の物品の割

表4 居室印象評価項目とものの量によるグループごと得点(n=619 77名×8室)

居室の印象評価項目	グループごと平均得点		全体の平均
	所有物の多い人	所有物の少ない人	
1 楽しさ	3.09	2.73	2.91
2 なじみ深い	3.30	2.70	3.00
3 ゆったり	2.97	2.92	2.94
4 清潔	2.62	3.65	3.13
5 整理	2.60	3.80	3.20
6 明るさ	3.31	2.95	3.13
7 伝統性	3.15	3.03	3.09
8 広さ	2.87	2.95	2.91
9 落ち着く	2.64	2.94	2.79
10 賑やか	3.28	2.48	2.88

合が他に比べ少なく部屋の印象が著しく変わっている可能性がある」と判断し、今回の分析対象から外した。印象評価は、5点があってもポジティブな回答となる。回答傾向として全体の平均値を表に加えた。

①印象評価と所有物の関係 表2は各入居者が所有するものの量を中央値69個で2分し、69個以上を所有する「ものが多いグループ」と69個未満所有の「もの少ないグループ」に分け、群間の平均を比較したものである。①楽しさ、②なじみ深い、⑥明るさ、⑩賑やかさの項目で、ものが多い群の平均点が高く、④清潔さ、⑤整理のされ具合、⑨落ち着く空間かどうか、の項目でももの少ない群の平均点が高い。これら項目間の平均の差にはいずれも有意性が認められた(Mann-Whitney's U test)。所有物の多寡は第三者の見た目の印象を少なからず左右することが分かる。その量が少ないことは見た目の「清潔感」や「整理されているという印象」を強める影響を与えている。また、ものが多い方が「楽しさ」や「明るさ」の平均点が高いことは、所有物の多さは居室に対するポジティブなイメージを増すことに貢献することの示唆と捉えられる。

②所有物の数・個人的要因と印象評価 各居室の印象評価の平均を代表値として、上記項目との相関関係を確認した。ものの総数と「清潔さ」、「整理」の間に強い負の相関が認められた($r=-0.72$, $r=-0.77$)。

次に、対象数が少ないことが $P>0.05$ の要因と考え、有意確率が0.05以上ではあるが相関係数が高いものについて述べる。A) 所有数との関係: 居室の「なじみ深さ」「伝統性」「落ち着き」の間に比較的高い相関が認められた($r=0.4$, $r=0.52$, $r=0.44$)。「なじみ深さ」に関しては、行為対象の数との相関はほぼ認められず、観賞対象数との間に比較的高い相関が見られる($r=0.55$)。さらに観賞対象の多さは「賑やかさ」の印象に貢献し、行為対象の多さは「明るさ」に対し負の相関を示していた($r=0.56$, $r=-0.52$)。B) 個人的要因との関係: 認知症程度と複数の印象評価の間に相関が認められた。「賑やかさ」、「なじみ深さ」との間に強めの負の相関が見られた($r=-0.68$, $r=-0.41$)。「ゆったりさ」「清潔

さ」「整理」「広さ」「落ち着き」との相関係数は、認知症が進むほどこれらの印象が強くなる傾向を示した。認知症が進んだ人の居室は広々と整理された印象がある一方で通常の日常の感覚との親和性は低いことを示唆している。また、施設での居住年数と居室の「ゆったりした」印象の度合いの間に強い相関傾向が認められた($r=0.64$)。

5) まとめ

第三者が居室を見た場合、その印象のいくつかの要素は室内に見えるものの量に左右されることが結果から明らかである。所有物の多さは、居室の楽しい印象など、ポジティブな傾向を強めることが予測される。また、認知症の程度と印象評価の複数項目で相関が認められたことはこの施設に暮らす認知症の人の居室がある一定の特徴を持つことを示唆している。今後、これらの知見に利用者自身の環境評価を併せて利用者の生活環境評価のためのツールを提示することを目標とする。

4-5 まとめ

高齢者居住施設利用者を対象として作成したプレイス・アタッチメント評価を行った結果、①評価指標が有効であることが確認され、②施設への愛着を増すような具体的な取り組みに好きなものを置いてもらう、施設内で知らないことを減らすといった示唆を得た。研究では入居者の生活を、居室の「もの環境」から客観的に捉えることも試みた。入居年数と所有物の量には相関は認められなかったが、ものの量が多い方がPA評価が高い傾向にある様子が認められた。

一連の研究の成果は、利用者自身による有効な施設評価方法を示すと共に、また、この評価傾向を利用者の居住環境の実態から客観的に推し量ることの可能性を示唆している。1章でも述べたように、高齢社会は今後しばらく継続し、その中では高齢期における居住場所移動が多くなることが予測される。新たな生活環境での利用者自身の実感としてのQOLを捉え考察を積み重ねることで、増加が予測される「転居」を成功させ健康な生活の持続につなげる余地を作る。

第4章参考文献

文2 S. M. Low & I. Altman 1992 Place Attachment – A Conceptual Inquiry I. Altman & S. M. Low(EDS.) 1992 Place Attachment Plenum Press New York

文2 Toshie KOGA, Yurika YOKOYAMA et al. (2002). Environmental Quality of Private Rooms and Resident's Possessions in a Japanese Nursing Home - Toward a New Viewpoint for Environmental Assessment of Nursing Homes, EBRA 2002

文3 Katz, Sidney et al. (1963). Studies of Illness in the Aged. The Index of ADL: A Standardized Measure of Biological and Psychosocial Function, JAMA, 185: 914-919.

文4 Barger, Eugene, (1980). A System for Rating the Severity of Senility. Journal of the American Geriatrics Society vol.28 No.5.

第4章注釈

注1 ADL指標はKatz(1963)^{文3}の指標を得点化した。

注2 認知症批評はBarger(1980)^{文4}による。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. 古賀紀江、横山ゆりか、李京洛、李賢姫 韓国と日本の高齢者居住施設における食事場所の印象評価 前橋工科大学研究紀要第11巻 2008 p46-p49

2. 古賀紀江、横山ゆりか 環境評価実験の体験学習 -日韓の高齢者居住施設における食事場所を題材として- 日本建築学会第9回建築教育シンポジウム 建築教育研究論文報告集 2009

3. 古賀紀江、横山ゆりか 高齢者居住施設入居者の「もの」環境をめぐる考察 所有物・第三者の印象評価・居住者自身による環境評価の関連 前橋工科大学研究紀要 第13巻 p57-p60

[学会発表] (計3件)

1. Koga Toshie, Yokoyama Yurika Impression Comparison of Dining Scenes at Elderly Residential Facilities in Korea and Japan the 20th IAPS Conference (ROME) 2008.8

2. 古賀紀江、横山ゆりか 環境評価実験の体験学習 日韓の高齢者施設における食事場所を題材として2008年9月 日本建築学会大会 (広島)

3. 古賀紀江・横山ゆりか 高齢者居住施設入居者の生活環境の質に関する研究 居室内の「もの」環境と第三者による居室の印象評価の関係 2010年9月 日本建築学会大会 (富山)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古賀 紀江 (KOGA TOSHIE)

前橋工科大学・工学部・准教授

研究者番号：10295454

(2) 研究分担者

横山 ゆりか (YOKOYAMA YURIKA)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：20251324

※本研究は、日本、韓国の高齢者居住施設の利用者、スタッフの方々のご協力により実施することで得た豊かな資料により遂行することができました。ここに、心から感謝の意を記します。